第18章

江迎の歴史と文化財

江迎の位置

この地域の小中学校

小学校：江迎小学校、猪調小学校

中学校：江迎中学校

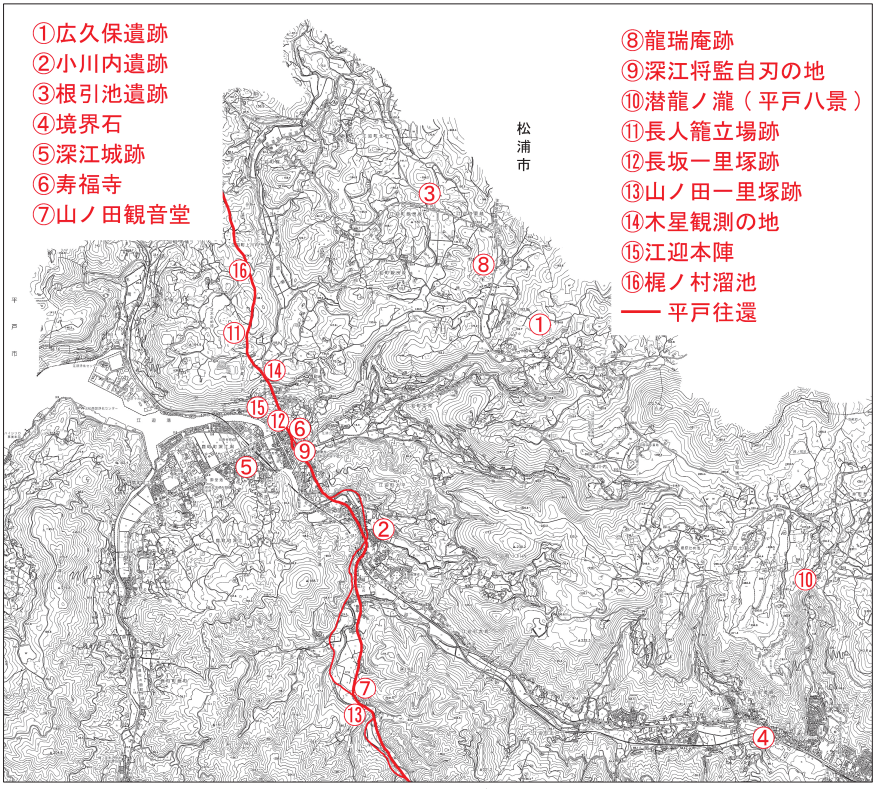
第18章　江迎の歴史と文化財

町から市へ

江迎は北松浦半島の中ほどに位置し、西は平戸市、北は松浦市、南は鹿町町、東は吉井と北松浦郡佐々町に囲まれていて、およそ6,000人が生活しています。町内は火山活動によってできた溶岩台地と、江迎川とその支流によって削られてできた谷が大部分を占めています。

1940年（昭和15）に江迎村が江迎町になり、それから69年の間北松浦郡江迎町でしたが、2010年（平成22）3月に北松浦郡鹿町町とともに佐世保市と合併して、佐世保市江迎町となりました。

江迎遠望



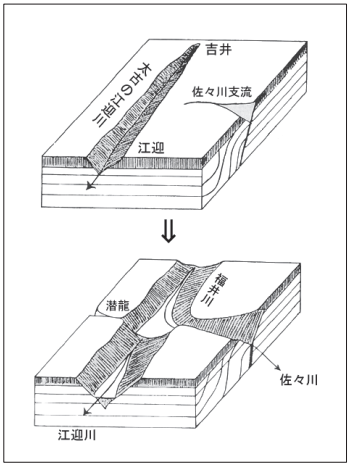
江迎の地図

江迎の由来

江迎川流域は、14世紀の南北朝時代や15･16世紀の戦国時代は「深江」と呼ばれていました。それが、江戸時代になると、現在の江迎という地名に変わっています。このことは、周辺の地形と深い関係があるようです。

今から約13,000年以前は氷河期と呼ばれる時代で、平均気温は現在より約5度低く、海面は今より90メートルも下がっていました。そのため、現在の江迎や鹿町からは、遠くまで山々が続く風景が広がっていたと想像されます。

その後、地球全体が温暖化することで海面が上昇し、江迎川の流れる谷にも海水が浸入(!溺れ谷)して、谷全体が一時、海の中に沈みました。そして時代が経つにつれて、海面は除々に現在のところまで下がってきました。しかし、江迎川は水量が少なく、流れてくる土砂が少なかったために、谷は土砂で完全に埋まらず、平野ではなく深い入り江となってその姿をとどめています。その地形の特徴が、古くは「深江」と呼ばれ、そして江迎になったと考えられます。



江迎川と佐々川の今昔

吉富一著『佐世保及近郊地形誌』改変

1 海面の上昇または陸地の沈降によって、陸上の河川や氷河によって造られた谷に海水が浸入してできる入り江のこと。リアス式海岸やフィヨルドも溺れ谷である。

創作昔ばなし　鬼の兄弟ゲンカ

昔、江迎川のほとりには兄弟の鬼が住んでいました。兄鬼のノキは江迎の高岩に丸太を組んで桟敷がけの小屋を作って住み、江迎の入り江で貝や魚を獲っていました。弟鬼のオアトウは上流にある福井の洞窟(福井洞窟)に住んで、草ノ尾などで猪や鹿を獲って暮らしていました。兄弟は、お互いの家を訪ねてはお酒を飲み、それぞれの獲物を分け合うなど仲のいい兄弟でした。

ある日、弟鬼が江迎にでかけたとき、兄鬼に「ノキ兄、おれも海で魚を獲りたいよ！」と言いました。仲が良いから「よし、今から船を出して漁をしよう！」と、たちまち末橘にとめていた船で沖までこぎ出しました。

入り江から出て平戸島が見えるころ、ふと海面を見ると大きな魚の影が見えました。兄鬼は弟鬼に「オアトウ、それ、網を打て！」と命じました。弟鬼は「心得た！」と網を打ったところ、それは何とクジラでした。

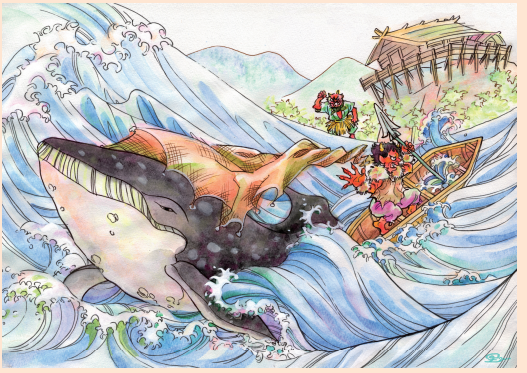
クジラは、長さ20尋（約36メートル）もある大物で、大暴れのすえ、網を海に引きずり込んでしまいました。

兄鬼は「それならこのモリを投げろー！」とモリを弟鬼に投げ渡しました。

ところが、モリの先はうまく固定できておらず、グラグラしていたので、舟底に柄の尻を打ちつけて固定しようとしたところ、勢いあまって舟底に大穴をあけてしまいました。

結局、網ごとクジラを逃がしたあげく、舟は沈んでしまい、兄弟は、おぼれかけながらも何とか大加勢の海岸に泳ぎついたのです。

陸に上がると、たちまち兄弟ゲンカが始まりました。



イラスト：松尾真里

兄鬼は「お前が慣れないことをするから、大事な網や舟をなくしたじゃないか！」と弟鬼を責め、弟鬼は「たった、それくらいのことでこの世も終りみたいなことを言うなよ！」と激しい言い争いのすえ、白岳と冷水岳の石をちぎり取っては投げ合いを始めました。そのせいで、お互いは平らな山になりました。そして、投げた石が九十九島になったのです。

それからも争いは収まりませんでした。とうとう、弟鬼のオアトウは「川の水は江迎には流さない」と言って、潜龍と直谷の境に大きな溝を掘って佐々川に流すようにしてしまいました。福井からの川が、佐々川に流れているのはそのためです。（作：久村貞男）

解説 数十万年前に佐々から福井に抜ける大きな地殻変動（佐々川衝上断層）が起こり、江迎川は吉井町直谷付近で断ち切られた。その結果、江迎川の上流部は断ち切られて福井川となり、佐々川に流れるようになった。一つの川が地形の変化で違う川に流れるようになるという事柄を題材にした物語が「鬼の兄弟ゲンカ」である。

縄文時代のスモーク料理

江迎の旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡は、15ヵ所で見つかっています。しかし、これまでに発掘調査が行われた遺跡は非常に少なく、詳しいことはわかっていません。

発掘調査が行われた栗越の広久保遺跡では、後期旧石器時代（約20,000年以前）から縄文時代早期（約8,000年前）の土器や石器が出土しています。

広久保遺跡の石器

江迎地区文化会館インフィニタス所蔵

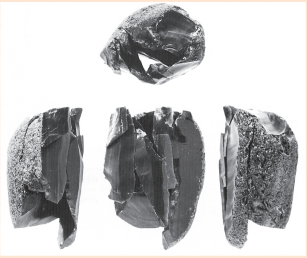
広久保遺跡の連結土坑

さらに、県内では珍しい、地下で煙が逃げる穴がつながった炉（連結土坑）が見つかっています。ここでは、狩りで獲ったシカやイノシシなどの肉を[2]燻製にして保存する食品加工が行われたのではないでしょうか。

2 食材を煙でいぶすことで、長期間の保存ができる調理方法。

コラム～太古の石器職人～

1999年（平成11）に発掘調査が行われた根引池遺跡からは、旧石器時代（約20,000年前）の石器が多く出土した。それらを詳しく分析した結果、一個の黒曜石の原石から、効率よく石器を製作する工程が明らかとなった。旧石器人たちは、有能なハンターであり、かつ石器職人でもあったのである。これらの石器は、現在九州国立博物館（福岡県太宰府市）で展示されている。



根引池遺跡出土の石器

小川内支石墓群

1965年（昭和40）に、遺跡の中を農道が通ることになり、遺跡が壊される前に発掘調査が行われました。遺跡からは10基の支石墓（第19章鹿町参照）が見つかっており、極端に小型の石棺が発見されています。縄文時代終末期（約2,200年前）の壺などが出土し、それは死者に添えられた副葬品と見られます。

小川内遺跡の現在

小規模ながら、保存状態の大変よい遺跡でしたが、調査が終わると道路工事が行われたため、現在は江迎中学校に一部が移築されています。

小川内遺跡の復元石棺

古墳時代から古代の江迎

古墳時代（約1,600年前）から平安時代（約800年前）までの遺跡はまだ発見されていません。しかし、その時代は米づくりの時代でもあることから、現在も水田地域である江迎川周辺の低地に、遺跡が眠っている可能性があります。

松浦党と江迎

平安時代の終わり頃から、長崎県北部や佐賀県唐津地方には「松浦党」と呼ばれる武士団がいました。その武士団のひとつだった峯氏が田平や鹿町とともに江迎を治めていました。もともと、峯氏は現在の伊万里市にいましたが、1193年（建久3）になると、本拠地を田平に移します。

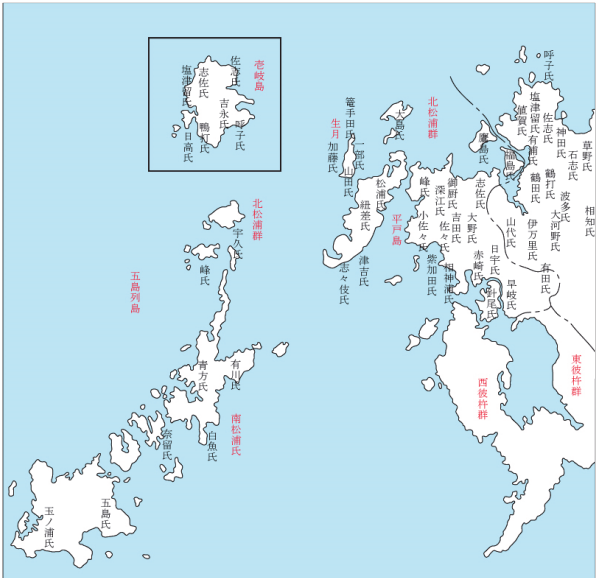
その後、室町時代の文明年間（1492～1501）の頃には、江迎の長坂や猪調、鹿町の領主となった深江純忠という人物が、深江城を住まいとしています。深江氏とは、峯五郎披に始まる峯氏の一族であり、開拓以後にその土地を治めることで、地名の深江を名乗ることになったのでしょう。

戦国時代の江迎

15世紀から16世紀の戦国時代は、平戸松浦氏が北松浦半島を武力によって統一し、戦国大名へと成長する時代です。その間には、佐賀の龍造寺氏や大村の大村氏などが北松浦半島に攻め込み激しい戦いが繰り広げられました。

深江氏が支配する江迎の東側、現在の佐世保市吉井町直谷は、松浦市の志佐とともに志佐氏が治めており、直谷城を本拠にしていました。（第14章吉井参照）

ところが、1493年（明応2）に、大村氏と龍造寺氏の連合軍に攻められて落城し、志佐氏は五島に逃れましたが、家臣に裏切られて滅んでしまいました。（前志佐氏の滅亡）



戦国時代の領土図

深江領と志佐領との境界石

前志佐氏が滅んでしまったため、直谷城は城主がいなくなりました。その後、田平にいた峯昌は平戸松浦氏と争いましたが、田平を平戸松浦氏に譲り、代わりに前志佐氏の領地をもらい受けることで和解しました。その後、峯昌は自ら志佐純元と名乗り、1494年（明応3）に直谷城に入って、志佐氏の名と領土を継ぐこととなります。（後志佐氏が起こる）

そして、志佐純元は古くから峯氏の領地であった江迎、鹿町に三男を住まわせ、深江純忠と名乗らせました。深江氏も峯氏の一族ではあるのですが、独立性の高い家だったようです。

コラム～なぜ峯氏は志佐氏を名乗ったのか～

松浦の志佐や吉井の直谷は鎌倉時代から志佐氏の領地であり、土地の人々に親しまれた家柄だった。そのため、その土地を支配し、政治を行い、地域の人々の信頼を得るには、志佐を名乗り志佐氏となることが都合がよいことになる。だからこそ峯氏は志佐氏に名を変えたと考えられる。

コラム～深江城（館）の鬼門に寿福寺あり～

鹿町の藤護神社一帯には、深江純忠が築いた深江城（館）があった。

そして、その北東、つまり「鬼門」には寿福寺（長坂地区）がある。鬼門とは鬼が出入りする方向を示しており、明らかに深江城（館）を築く際に、何事にも嫌われた鬼門を封じることを意識している。

深江城と寿福寺の位置関係

寿福寺遠景

鬼門にあたる寿福寺は元々、長福寺という名であったが、徳川吉宗（8代将軍）の嫡男（後継ぎ）「長福丸（後の9代将軍家重）」と同名であることから、1717年（享保2）に寿福寺と名を改めている。

深江氏と平戸松浦氏

1498年（明応7）に平戸の松浦弘定が、宗家松浦氏の城である相浦谷の大智庵城を攻めたときに、江迎・鹿町を治めていた深江純忠は、平戸方の武将として参加しています。その結果、大智庵城は落城して、宗家松浦氏第15代当主の政は戦死してしまいました。これは、相浦谷がこれより一時期、宗家松浦氏の支配地ではなくなる一大事件でした。（第4章相浦谷参照）

その後、平戸の松浦興信は、天文年間（1532～1554）頃に、深江純忠と共に直谷城を攻め、直谷城主だった志佐純次を降伏させました。このことは、15世紀の末には、すでに深江氏は平戸方の家臣団の一員に入っていたことを物語っており、一族である志佐氏への攻撃は、親子兄弟、主人と家臣が争う戦国時代を象徴する出来事といえるでしょう。

昔ばなし～水かけ地蔵物語～

今から500年ほど昔、平戸に松浦義（天叟公）という殿様がいました。この殿様は、戦も強かったのですが、それよりなにより、とても心の優しい人でみんなに慕われていました。

ある日のこと、国（領地）を見回りに出かけた殿様は、平和になったことに安心して、国を子どもに譲り、江迎で静かな生活を送ることにしました。

心の優しい殿様は、人々がいつまでも仲良く暮らせるように願いを込めて、木の地蔵を彫りました。地蔵ができると、今度はお堂を建て、そこに大事に祀りました。（このお堂は、現在の栗越地区にあったといわれ、龍瑞庵と呼ばれたといわれています。）

それから100年以上経った頃、壊れかけたお堂の中から、近くで遊んでいた子ども達が地蔵を偶然発見しました。

子ども達は地蔵を川に運び、水をかけたり、つけたり、飛ばしたり、またがったりして遊んでいました。

するとそこへ、お役人がたまたま通りかかりました。お役人は、「お地蔵様にいたずらをしてはいかん！」と、子ども達を叱り、その日のうちにお堂を修理して地蔵を収め、扉に頑丈な鍵をかけてしまいました。

龍瑞庵跡

イラスト：岩男貴美子

水かけ地蔵

その晩、叱ったお役人は原因不明の高熱を出して苦しみ、寝込んでしまいました。

そして、眠り続けた3日目の晩、

「わしは龍瑞庵の地蔵じゃ。せっかく子ども達と楽しゅう遊んどったとに、鍵ばして閉じ込むっとは、何事じゃ。いままでんごと、自由の身が欲しかっぞ！」

と、寝たままのお役人が話したそうです。

それを聞いた周りの人々は驚いて、川で遊んでいた子ども達に地蔵を返しました。すると、お役人の熱は自然と下がったということです。

コラム～山ノ田薬師堂の木造如来坐像～

この山ノ田薬師堂の仏像は、元は田平の弥勒寺にあったものと伝えられており、胎内（仏像内部）の墨書の銘文から平戸の領主松浦隆信が寄進したものであることがわかっている。1868年（明治元）の廃仏毀釈によって弥勒寺が廃寺となったため、山ノ田に安置することになったという。

山ノ田にある木造如来坐像を製作した仏師は、藤原朝臣運貞と猪熊治部丞であることが胎内に記され、1558年（永禄元）の作であることがわかっている。

両仏師は博多に住んでいたという記録があり、相浦谷周辺で宗家松浦氏第16代親のときも、盛んに仏像を作っている。

山ノ田薬師堂の木造如来坐像
（市指定文化財）

戦国の終わりと江戸の始まり

平戸松浦氏は、1572年（元亀3）に針尾島を攻めて針尾氏を大村に追い出し（第12章針尾島参照）、ほぼ北松浦半島の統一をなしとげました。しかし、1586年（天正14）には大村氏、有馬氏、有田氏、波多氏が連合して、三川内や早岐地方の国境を攻める事件が起こります。そのとき平戸方の井手平城は落城しましたが（第11章三川内参照）、広田城で攻撃をはねかえし（第9章広田参照）、広田の舳ノ峯を国境とすることで領土を確定しました。それから間もなく、豊臣秀吉が九州を平定したことで長い戦国時代は終わり、その領土は江戸時代の平戸藩の領地に引き継がれました。

1603年（慶長8）に徳川家康は将軍になり、江戸幕府を開き、江戸時代が始まります。平戸松浦氏も幕府の家臣団に組み込まれ松浦鎮信が初代藩主となり、平戸藩が誕生しました。

その頃の江迎には深江将監忠昌がいます。深江将監忠昌は、1614年（慶長19）に松浦鎮信の死から40数日あまり後に切腹しています。これは主君である松浦鎮信への[2]殉死といわれています。

1615年（元和元）に幕府は[3]一国一城令を発しました。そのため、深江氏も深江城を出て平戸城下に移住し、長い間の江迎と鹿町の支配を終えました。

深江将監自刃の地（市指定文化財）

深江三代の墓

※寿福寺境内

2　主人の死に殉じて死ぬことを言う。殉死は、いかに主君への忠誠心が高いかを死をもって示すことであり、お家の安泰と永続のために全国的に流行した。そのあまりの多さに幕府は1663年（寛文3）に殉死を禁止する令を出したほどである。

3　1つの領国に対して1つの城しか保有が認められない制度。大名の武装解除の意味もあり、諸大名は居城以外の城を取り壊した。

昔ばなし～潜龍ノ瀧の竜～

これは平戸八景の1つ「潜龍ノ瀧」にいい伝えられるお話です。

平戸藩主第35代熙（観中公）が江迎村を見回った際、滝の存在を知り、谷を登っていきました。木々の間から見える白い糸のような滝は、近づくと水音が激しい滝でした。

藩主が、清々しい気持ちで滝壺をのぞくと、滝壺から竜が頭を出して、こちらを見ているではありませんか。

藩主はめでたく縁起がいいと喜び、「千両にもまさる兆しじゃ、潜龍と名付ける」と言い、この滝を「潜龍ノ瀧」と名付けられました。

潜龍ノ瀧（国指定名勝）

さて、この「潜龍ノ瀧」に住む竜は、ときどき滝壺から這い出し、白岳の山頂へ遊びに行っていました。

イラスト：岩男貴美子

ある日、猟師が白岳の崖の上に白く輝く山鳥を発見しました。めったにないものを見つけたと、猟師はここぞとばかりにねらいを定めて撃ちました。

しかし、不思議なことに撃ち落としたはずの山鳥は、いくら探しても見つかりませんでした。

しばらくすると、白岳神社の神官の夢枕に、竜が現れるようになりました。

不思議に思った神官は白岳に登ったところ、なんと白い竜が石の祠に巻き付いたまま死んでいるではありませんか。

神官は竜を丁重に弔い、落ちていた1枚の竜の鱗を持ち帰り、ずっと大切にしていたということです。

代官所ができる

1710年（宝永7）には、江迎の長坂に代官所が置かれます。長坂村、江迎村、猪調村、鹿町村がその管理下に入りました。代官所では年貢の取り立てや訴えの受付、法律違反の取締や道の整備など、現在の市役所と警察署、裁判所を合わせたような役割がありました。

コラム～女休日～

江戸時代には、年に2回ほど、女性だけの年中行事として、講中（一種の会員）の家を持ちまわり、食事をして1日を過ごす休日が公認されていた。これは、「観音講」といい、観音像を描いた掛け軸を座敷にかけ、持ち寄った食材などの経費を平等に分担して、食事の準備から始まり、簡単なお経をあげ、その後は食事と雑談で過ごした。地方によっては、男性がその日は家事一切を行うこともあり、日頃苦労をかけている女性に感謝する一面もあるようだ。

旧佐世保地区では少なくなったが、江迎、鹿町では今でも盛んである。

平戸往還の開通

山ノ田一里塚跡

平戸藩は、藩主の領内巡検、長崎港の警備、江戸への参勤交代をはじめ、領内の人々の往来や商品の物流のために道路を整備しました。

この道路は平戸往還と呼ばれ、田平から東彼杵で長崎街道に合流するまで、全長約62キロメートルもあります。

往還には、「一里塚」という1里（約4キロメートル）ごとの道しるべや「籠立場」という休憩所が整備され、中継点として宿屋などがある「宿場」がありました。

平戸を出て平戸往還を通るとき、最初の宿場があったのは江迎でした。

長坂一里塚跡

長人籠立場跡

お殿様の宿、江迎本陣

江戸時代の「宿場」には、宿屋のほかにも常に飛脚や馬が用意されており、現在の郵便局と鉄道の駅を兼ね備えた交通機関の役割もありました。当時、江迎の中心だった町筋は「江迎宿」と呼ばれていました。

宿場には、参勤交代のときの大名（藩主）の宿舎である「本陣」も整備されました。本陣には、特に立派な建物が用意されましたが、新たに建てるのではなく地域の庄屋や豪商の家、造り酒屋を本陣とすることもあったようです。

江迎本陣（県指定史跡）

江迎本陣となった「山下家」は、1688～1703年頃(元禄年間)に創業したといわれる造り酒屋で、今も造り酒屋を営んでいます。平戸往還の本陣の中で、唯一当時の建物が残っており、中でも1688年(元禄元)に建てられたと伝わる「醞蔵」は、長崎県指定の文化財として保存されています。この建物は、釘を1本も使わずに中央の1つの柱で全てを支える特殊な方法で建てられていて、広い作業スペースを確保できるよう工夫されています。

「醞蔵」とは酵母を育てるための蔵という意味で、気温や湿度調整のため、2階の窓を開閉できるようにもなっています。

山下家の醞蔵(県指定有形文化財)

山下家は、地元の人から「御本陣」と呼ばれており、中でも1833年(天保4)に建てられた「枕水舎」は、庭の泉水の中に突き出た格好で建てられており、藩主が休んだときに枕の下まで水が来ているということから名付けられました。

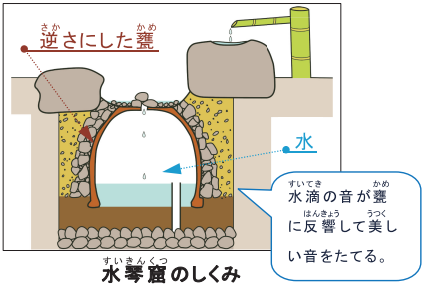
御成門から入る屋敷には、藩主専用の座敷や風呂等の部屋のほか平戸藩主第35代 熙(観中公)や京都大徳寺の江月宗玩和尚の書、藩主が使用する日用品(食器類・漆器類等)、庭には「水琴窟」など数多くのものが残っています。

「水琴窟」は、今では珍しい仕掛けで、水滴の反響により琴のような音を発生させます。

御成門(藩主専用の門)

枕水舎から見た庭

水琴窟



水琴窟のしくみ

幻の平戸往還　梶ノ村溜池

江迎を通る平戸往還には、現在、通行できない箇所があります。それは往還があった場所に、大正時代の初め頃に灌漑用溜池が造られたため、往還が水中へ沈んでしまったのです。

しかし、池の水位が下がると、往還沿いに植えられた松の古い株が姿を現すことから、普段は目にすることができない平戸往還の幻の区間となっています。

梶ノ村溜池

コラム～吉田松陰の腰掛石～

吉田松陰像

※画像提供：山口県文書館

腰掛石

江迎の中央公園（庄屋跡）内には記念碑とともに吉田松陰（1830～1859）が座ったという腰掛石が残っている。

吉田松陰は長州藩士の次男として生まれ、幕末から明治維新にかけて、大きな影響を与えた思想家であり、多くの優秀な人材を指導した教育者である。

松陰は1850年（嘉永3）、21歳のときに出た旅で、平戸へ向かった。平戸にいた[4]葉山鎧軒や、山鹿流兵法の宗家だった山鹿高紹に兵学を学ぶための旅だったのだが、その旅の様子を日記に残している。日記には佐世保から平戸へ行く途中、江迎に1泊する様子が次のように書いてある。『八里（早岐～江迎）の間、山道ばかり。雨も降り、他に人もなし。道は泥で滑り、歩きにくい。夜になり、なかなか宿が見つからず探し回る。』と大変苦労したようだ。やっと、庄屋の家に泊めてもらえることになった松陰はくたくたで、まず庭先の石に腰を下ろしてしばらく体を休めたのかもしれない。

4　葉山佐内（高行）（1796-1864）　号を鎧軒という。平戸藩の武士。斉藤一斎に陽明学を学び、大坂藩邸で勤めたこともあり、海外事情にも詳しかった。

江迎に伝わる伝統行事

江迎には江戸時代から伝わる多くの伝統行事や伝統芸能が、現在も守り継がれています。これらの伝統行事や伝統芸能は、江戸時代の民衆の生活の様子や素朴な願いを読み取ることができる貴重なものです。

きねかけ祭り　中尾地区

古来より中尾地区に伝わる民俗行事。豊作と子孫繁栄、家内安全を祈願して行われるもので、夫婦を演じる人と囃したてる人（介添役、「ススメ」という）、見物人とが一体となった風変わりでユーモラスな祭りです。

この祭りは、毎年10月28日に行われるもので、日本人の祖先の食生活の原形を留めているとも言われており、「記録保存等の措置を講ずべき無形民俗文化財」として国の選択を受けています。

きねかけ祭り

水かけ地蔵祭り　東江迎地区

昔この地方に疫病（伝染病）が流行ったときに、栗越地区の子どもたちが龍瑞庵から地蔵様（現在は寿福寺に安置）を持ち出して水浴びをさせて遊んだところ、たちまち病気が治ったことからこの祭りが始まったと伝えられています。

毎年8月23日、24日の両日に行われています。

水かけ地蔵祭り

長坂浮立　長坂地区

豊作祈願や豊作祝い、雨請い、祈祷、その他祝い事のために奉納されており、鉦の銘から天保年間（1830～1843）に始まったとされています。

明治～大正時代頃の長坂浮立と仮装行列

※写真提供：山下庄左衛門氏

「浮立」はかつて佐世保市内にもたくさん伝わっていましたが、次第に行われなくなり、長坂浮立の他には、木場、白岳、上原、権常寺、浦川内、北川内の6ヵ所で行われるのみとなってしまいました。

ちなみに「浮立」の由来は、賑やかに奏でる鉦や笛などの音に身も心も浮き立つことから「浮立」となった、あるいは「風流」がなまって「浮立」になったといわれています。

明治の江迎

江戸時代が終わり、明治時代に入ると日本は国を挙げて近代化を目指しましたが、地方では江戸時代の雰囲気はそのまま残されていました。

そのような中、1873年（明治6）6月、[5]徴兵令に反対する田平、御厨、生月、そして五島列島小値賀村の農民が暴動を起こしました。小値賀村の農民はまず宇久島に集まり、その後江迎村に集合しています。10月になって長崎県は警察官を派遣し、妙観寺に1,700人余を集め、説得して解散させました。その際、小銃186丁を押収し、首謀者31人を逮捕しています。

5 国民の兵役義務を定めた法令で、明治政府により1873年（明治6）1月10日に公布された。満20歳となった男子は徴兵検査を受け、合格者の中から抽選で3年間兵役につくことを定めた。当時の民衆はこの徴兵制を「徴兵懲役一字の違い、腰にサーベル鉄鎖」とうたって嫌い、徴兵制に反対する一揆も各地で起こった。

江戸時代が終わり、明治という新しい時代を迎えるなか、体制に反対する騒然とした様子がある一方で、近代化の象徴である学校は1874年（明治7）9月に江迎小学校、翌10月に猪調小学校と次々に開校しています。

江迎小学校（昭和49年頃）

猪調小学校（昭和15年頃）

郷土の人～三角形の人生 徳田真寿翁～

徳田真寿翁墓碑

1867年（慶応3）に生まれた徳田真寿は、幼い頃からユーモアに富んだ人で、1944年（昭和19）に亡くなるまで数々のエピソードがあり、地元では「トンチキヤ」と呼ばれて親しまれていた。また、旅行、古銭・切手の収集、絵画等多くの趣味をもっており、古銭は3,000種類以上、切手は20,000枚も収集し、全国でも有名であった。特に、三角形へのこだわりを強くもっており、「三角形は円に通ずる。三角形を合わせると円になる。（中略）みんな輪になって喜びを共にする」ことから、家具、お膳、皿、箸のみならず、自分の墓石も三角形に造るなど、人生を三角形で遊んだ人でもあった。

炭鉱が主要産業になる

江迎や鹿町は、地質的に石炭が豊富で「北松炭田」と呼ばれていました。石炭は江戸時代から小規模には掘られていましたが、明治になって企業化して、大規模な採掘が行われるようになりました。

江迎では1912年（大正元）に浜野治炭鉱が開鉱し、1933年（昭和8）には潜龍炭鉱が、その翌年には江迎炭鉱の採掘が本格化し、炭鉱の町として発展していきます。人口も炭鉱産業の発展とともに増え、昭和30年代にピークになり、その後、1967年（昭和42）に最後の炭鉱が閉山すると、人口の減少が続きました。

昭和初期の江迎

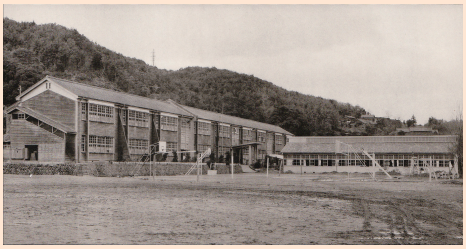
※写真提供：山下庄左衛門氏

また、鉄道は1939年（昭和14）に国鉄伊佐線の潜龍から平戸口間が、1944年（昭和19）に潜龍から吉井間が開通しています。その後、1945年（昭和20）に佐世保から佐賀県伊万里までの全線が開通し、国鉄松浦線となります。この鉄道は北松浦半島の石炭を輸送することが主な役割でした。

コラム～猪調中学校と越境通学～

吉井町の中央部に、飛び地のように江迎町田ノ元 住吉地区がある。この地区の小・中学生は、江迎の猪調小学校や江迎中学校に通学するよりも、吉井南小学校や吉井中学校がはるかに近いので、吉井の学校に通学している。

これと似たようなことが、炭鉱が盛んなときにも起こっていた。



猪調中学校

その時は今とは逆で、吉井町の直谷や福井地区の中学生のなかに、町の境を越えて潜龍にあった猪調中学校に通う生徒がいた。当時は炭鉱産業が盛んで、人々も多く、税収が高かったこともあり、学校の運営にも余裕があったことから越境通学が半ば公認されていた。

しかし、猪調中学校は、炭鉱が閉山すると生徒数が激減して、1963年（昭和38）に江迎中学校に統合されて、廃校になってしまった。

新しい地域のまちおこし

江迎では、農業などの第1次産業の振興がこれからの課題となっていますが、近年、夏に行われる千灯篭祭りには多くの観光客が訪れ、その数は年々増加し続けています。

これからは、このような「江迎ならでは」の魅力を発掘し、地域にある資源を活かしたまちづくりを行うことが大切です。

そのためにも、あらためて郷土を見直すための調査などを行う必要があるでしょう。

千灯篭祭り

地域の年表

時　代	出　来　事
旧石器時代	約20,000年前　根引周辺で狩りや、石器製作が行われていた。
	約10,000年前　白岳一帯で狩りが行われていた。
縄文時代	約8,000年前　広久保遺跡で肉の燻製が作られていた。
	約2,200年前　小川内で支石墓群が作られた。
戦国時代	
1470年(文明2)頃	松浦義(天叟公)が栗越に龍瑞庵を建て、自作の地蔵尊木像を安置する。
1498年(明応7)	深江純忠が平戸方の武将として大智庵城を攻める。
江戸時代	
1614年(慶長19)	深江将監忠昌が寿福寺境内地で自刃する。
1710年(宝永7)	長坂に代官所ができる。
1813年(文化10)	伊能忠敬が江迎の測量を行う。
近代	
1873年(明治6)	徴兵令に反対する暴動が起きる。
1874年(明治7)	江迎小学校、猪調小学校ができる。
1939年(昭和14)	国鉄伊佐線、潜龍～平戸口間開通。
1940年(昭和15)	江迎村から江迎町となる。
現代	
1967年(昭和42)	江迎で最後の炭鉱が閉山する。
2010年(平成22)	佐世保市と合併し、佐世保市江迎町となる。